国立公文書館
分類 返 赤
配架番号 3 A 14 64-9

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http //www jacar go jp/

40181

東亞研究所藏書之印

16 9.20

# A・プロコフィエフ
# 「ソ連の原料資源」

經研資料譯第六四號

昭和十六年八月
陸軍省主計課別班

東亞研究所

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

# はしがき

本資料は「世界經濟と世界政治」誌一九四一年第五號所載A・ブロードスカヤ「フランス植民地の原料的資源」（A.Brodskaya — Syrebye resursy frantsuzskikh kolonij）を飜譯せるものである。

本資料はフランス植民地の原料的資源の問題を詳細に取扱つたものであるが、特に印度支那に關する部分は現下の情勢から必讀に値する。

昭和十六年八月

陸軍省主計課別班

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

# フランス植民地の原料資源

A・ブロードスカヤ

## 一

フランスはその植民地領土の面積において（イギリスに次いで）世界第二位を占めてゐる。世界の殆どすべての部分に散在してゐるフランスの植民地領土は、その本國をば面積において二十倍以上も凌駕し、人口において一倍半以上も凌駕してゐる。（註）イギリスは勿論、ベルギー及びオランダとも異つて、フランスはその植民地の經濟的資源を極めて僅かしか利用してゐなかつた。このことは特に、イギリス及びフランスがそれぞれの植民地より輸入せる各種の原料の輸入總額における比重に關する次の資料によつて理解される。

一九三八年度の輸入總額における植民地よりの輸入額の比重（註二）

| | 羊毛 | 棉花 | 亞鉛 | 鉛 | ニッケル | ゴム |
|---|---|---|---|---|---|---|
| フランス | 六、八 | 三、四 | 一二、八 | 三六、〇 | 四七、一 | 三三、七 |
| イギリス | 八二、九 | 四五、三（註三） | 六五、四 | 八七、七 | 八九、五 | 八四、五 |

註一、一九三六年の調査によれば、フランス植民地領土の面積は一千二百五十萬平方粁であり、その人口は六千八百九十萬であつた。フランス植民地の重要部分はアフリカにある。北アフリカ、西アフリカ及び赤道アフリカは、フランス植民地の總面積の九一、二%、人口總數の五七、四%を占めてゐる。面積及び人口において第二位を占めてゐるのはアジアの植民地であり（面積一七、四%、人口一三八、八%）、第三位は太洋洲が占めてゐる（面積一〇、三%）、人口一〇、二%）。

註二、カミール・フイデル「一九三八年のフランス、植民地間の貿易」

註三、エジプトを含む。

第一次世界大戰の勃發前には、フランス植民地はフランス帝國主義によつて主として、高利貸的事業、各種の金融＝及び土地投機の對象として搾取された。このことはフランス資本主義自体の發展の特殊性ーイギリスの植民地的帝國主義と異なる「高利貸的帝國主義」ーによつて說明される。

一九一四ー一八年の大戰以前には、フランスへの原料供給者としての植民地の意義は極めて小さかつた。このことは、一九一三年のフランスの原料輸入額において植民地の占めてゐた割合が僅か四、八%にすぎなかつたことを示せば充分であらう。フランスの原料輸入額における植民地の比重が小さかつたばかりでなく、植民地生產物の絕對額も又小さかつた。卽ち例へば一九一四年の印度支那における護謨の採取額は僅か百

六十噸にすぎなかつたし、石炭の採掘は事實上行はれてゐなかつた。

だが第一次世界大戰はその巨額の需要を以て植民地における工業の發展と原料的資源の採掘とを促した。戰爭時代はフランス、ブルジョアジーの眼を開き」、軍需原料に關してフランス植民地に如何に大なる可能性が潛んでゐるかを示した。

第一次世界大戰の過程においてフランスは、本國需要の補償のためにも、又植民地への輸入額の激減と關聯して植民地自体の需要をカヴアーするためにも、植民地の原料的資源を利用することを目的として、植民地の經濟を再編成した。かゝる目的のために、第一次大戰の諸年度には、北アフリカの各地において石炭の試掘が行はれはしたが、しかしどく僅かの成果しか得られなかつた。

第一次世界大戰當時における植民地產原料の對佛供給の强化は主として、工業原料の增產によるよりも、植民地自体における消費の縮小及び輸出の統制によつて行はれた。鑛物的原料の產額について見るに、第一次世界大戰の諸年度には、至る處にその減產が現はれた。この點において大なる役割を演じたのは勞働者の不足である。蓋し植民地は、植民地兵の外に、フランス工業のために尨大な勞働者軍を供給したからである。なほその上、植民地との交通の困難並びに封鎖的狀態も何等かの役割を演じた。第一次世界大戰の四年間にフランス植民地から輸入された食料品及び原料は約二百萬噸にすぎず、而してこのうち六十四萬噸は各種の鑛物であつた（「ウーヴル」紙一九四〇年二月九日號）。戰爭中に植民地よりの輸入の增加したるは、食料品であつて原料ではなかつた。

第一次世界大戰の諸年度は、フランス植民地よりの原料輸入の不充分さとフランス植民地の可能性の不完全な利用とを特に明瞭に示した。一九二六年に植民地省經濟局の局長であつたレジスマンセは「ユーロップヌーヴエル」紙上（一九二六年五月一日號）に次のやうに書いてゐる。

「一九一四―一八年の大戰當時には、組織の缺如と準備の不足が原因で植民地が本國から受取り得た、又受取られねばならなかつたものと、植民

地が本國に供給したものとの間に、大きな開きを生じた。」

## 二

第一次大戰の終結後、フランスの經濟的構成には大なる變化が起つた。フランスは大工業國に轉化され、新しい大工業中心地、新工業部門（化學工業、アルミエユーム工業等）が出現し、資本の集中及び集積の過程は强化された。再建されたフランス工業に對する原料保證の問題が新に現はれた。フランスの重工業及び金融資本は、植民地領土の開發を强化してゐる。植民地資源の研究を目的とする多くの委員會が設置され、フランス植民地における諸種の原料の增産を目的とする各種の方策が實施されてゐる。植民地との經濟的關係は、フランスがその帝國內における商品取引の增進と植民地に對する搾取の强化とによつて恐慌よりの血路を見出さんと試みた。かの世界經濟恐慌の時代に、フランスにとつて特殊な意義を持つに至つた。

フランス植民地領土へのフランス資本の輸出は强化されてゐる。一九一三年には、外國におけるフランスの會社の有價證券發行額は、植民地におけるそれを三倍も凌駕してゐたが、一九二九年には、植民地における フランスの會社の有價證券發行額が外國におけるそれを二倍も凌駕してゐた。

フランスの會社の有價證券發行額

（單位百萬フラン）　（註）

| | 一九一三年 | 一九二九年 |
|---|---|---|
| 植民地における發行額 | 一一八〇 | 一四九二六 |
| 外國における發行額 | 三三七九 | 三四〇七 |

（註）マルバス「資本の國際的移動」一九三四年　二〇三頁

一九一四―一八年の大戰後には、植民地におけるフランスの資本は、大戰前よりも大規模に、鑛業、護謨栽培等に投下されてゐる。

かくしてフランス經濟における植民地の役割は依然としてその潜在的可能性に一致してゐないとはいへ、殊に原料供給者としての植民地の意義は著しく増大した。一九三九年―一七月のフランスの原料輸入額における植民地産原料の比重は、一九一三年の四、八%に對して一二、八%であつた。

植民地における支配權をその手に收めたフランスの金融資本は、原料生産部門に巨額の投資を行つた。だが植民地におけるフランスの投資總額は、一九一四―一八年の大戰後の増加にも拘らず、依然として大して大きくない。

植民地開發の寄生的性格は、フランスの金融資本がその植民地において交通發達のための必要な措置を採らなかつたといふ點にも現はれてゐる。完備せる交通路及び鐵道の缺如せるため、工業原料の生産は專ら、河川、海岸線及び港に近い土地で行はれてゐる。このことは就中赤道及び西アフリカ、印度支那に關して云へる。印度支那では、奥地に尨大な石炭の埋藏があるにも拘らず、採掘は河川の流域でのみ行はれてゐる。赤道アフリカでは、サハラ沙漠横斷鐵道の計畫は未だ實現されるに至つてゐない。これに關しては、ドイツの「モルゲンブラット」紙上（一九四〇年三月七日號）に極めて興味ある論文が掲載された。同論文において筆者は、フランスは戰爭遂行中僅か五日間を以てサハラ沙漠横斷鐵道を建設し得るだけの費用を消費したと書いてある。フランスにおける商船數の不足、外國商船への依存も、フランスから特に離れてゐる植民地の利用が不充分であることに關して相當の役割を演じた。而してこのことは、植民地産の原料の價格にも反映せざるを得なかつた。

フランスの金融資本は何よりも先づ、本國の原料と直接競爭しないやうな原料の生産を促進した。これに關しては、例へば、印度支那における巨大な鐵鑛の層が現在まで事實上採掘されていないといふ事實を指摘すれば充分であらう。嘗て植民地最高會議經濟部長の地位にあつたフーベルトは彼の勞作「吾が國の植民地資源について何を知らねばならない

か」において、「フランスはその植民地における鐵鑛の豐富な層の採掘に關心を持つてゐない」旨卒直に聲明した。即ち同書一〇二頁において著者は次のやうに述べてゐる。

「吾が植民地の多くは鐵鑛の産地を持つてゐる。だがフランス本國内に豐富な鐵鑛山があるので、植民地の産地は吾々の關心を呼はない」。而して著者は、「植民地の産地は他國へ委ねるがよい」と聲明してゐる。注目すべきことは、フランスの植民地における外國の投資額は大きくない。北アフリカにおけるベルギー及びイギリスの投資額も、印度支那における日本の投資額も取るに足らない。ニューカレドニヤにおけるイギリス及びアメリカの資本のみ可なり大なる意義を持つてゐる。

フランス帝國主義による植民地開發方法の特徴は、フランスの大産業及び金融獨占家團が植民地資源の開發權を一手に握つてゐる點にある。

植民地におけるこの獨占家團の利益を實現せるものは、コールマン、ヴアンデル、ミラボー、マレー等の代表者である。植民地開發會社の多くはフランスにある會社の支店であつて、獨占の役割を演じてゐなかつた。アモンは彼の著書「フランスの支配者」（第五章）のうちに次のやうに書いてゐる。「植民地には本國におけると同じ家族がある。彼等は自己の手に、富の開發權を、植民地の全經濟生活に對する支配權を握つてゐる」（二五頁）。

三

第二次世界大戰の準備策に於いて、フランスはその植民地資源の最大限度の利用の問題に大なる注意を拂つた。

フランスの前植民相マンデルは一九四〇年初頭の演説に於いて、植民地資源の廣汎な利用計畫を發表した。彼は次のやうに聲明した。「フランスの植民地は第二次大戰勃發後の僅か數週間に、第一次大戰の全期

度におけるよりも多量の原料及び資料品を本國に供給するにゐが出來るであらう。殊に植民地は八十萬噸の原料（木材三十萬噸、石炭三十五萬噸、護謨六萬噸等）を供給しなければならなかつた。」（註）

（註）「ウヰーダル」紙一九四〇年二月二日號、

一九三八年七月十一日の戰時國民組織に關する法律及びその後にアフリカ植民地における消費の制限による、植民地生産の擴充、要源の動員に關する諸方策を規定した。植民省は今次大戰勃發前の諸年度（一九三八年及び一九三九年）に植民地における各種原料の增産に關する諸政策を實施した。鄙もトンキン及びマダガスカルにおける石炭の採掘が強化され、又棉花の增產に關する措置も採られた。

アフリカの植民地は各種の原料的資源に富んでゐる。注がれるべき資源はこれまで充分に調査されてゐなかつた。北アフリカのフランス領土には、豐富な森林、鐵鑛、燐灰岩及び有色金屬の產地がある。佛領西アフリカでも、諸種の金屬鑛が發見された（註）。

（註）マーレット「海外のフランス領土の工業化の問題」一九三九年一九九頁。

西アフリカの廣大な面積は有用な森林を以て覆はれ、又この地方は落花生を豐富に產してゐる。

赤道アフリカの重要資源に關する調査は特に不充分である。

佛領赤道アフリカの廣大な領土は、この地方に有色金屬の多數の鑛層のあることが豫想されてゐるにも拘らず、現在までのところまだ產業開發の對象となつてゐない。

印度支那はフランス植民地の間にあつて、その鑛物原料及び農業原料の種類と量において特殊な地位を占めてゐる。良質の石炭、鑛石、各種の有色金屬及び鐵鑛の著大な埋藏、工業的意義を有する農業原料

（棉花、護謨）の生産にとつての有利な氣候的條件のために、印度支那はフランスにとつて巨大な軍事的意義を有する植民地の第一位におかれてゐる。

## 四

フランス領土の種々の法律的地位（保護領、委任統治區域及び本來の植民地）は、植民地の開發にとつて、從つて又原料產地としての植民地の利用の評價において、何等の意義をも持つものでない。

北アフリカの領土のうちでもアルジェリヤは、フランス本國の「延長として、巨大なアフリカ縣を形成し、特殊な地位を形成し、特殊な地位を占めてゐる。その領土がフランスに近く（アルジェリヤからマルセーユまでは飛行機で六時間、汽船で二十時間を要す）、交通が便利なために、アルジェリヤはフランスの食糧的基地としてフランス植民地帝國内にあつて重要な地位を占めるに至つた。アルジェリヤは豐富な鑛物の埋藏を持つてゐるにも拘らず、最近まで依然主として農產物の輸出國として止まつてゐた。アルジェリヤの輸出總額において鑛物の輸出額が占めてゐる割合は、一九三七年にはたゞか四％にすぎなかつた。

だが鐵鑛資源の埋藏量に關しては、アルジェリヤは最も富めるフランス植民地の一つを形成してゐる。種々の、極めて概算的な評價によれば、アルゼリヤにおける鐵鑛の埋藏量は一億噸を算定されてゐる。アルジェリヤの鐵鑛は良質であつて、金屬の含有量が多く（五〇％乃至六〇％）、少量の燐を含んでゐる。鐵鑛はアルジェリヤの殆ど全土に埋藏されてゐる。鐵鑛（及び燐灰岩）の最大の鑛脈は、クイア及びコンスタンチーヌ以東の山岳地帶にある。

アルジェリヤにおける鐵鑛の採掘には小規模ながら、イギリス資本及び部分的にはスウエーデン資本が參加してゐる。最大の會社は、一九〇三年に創設された「ウエンツァ」會社である。一九三七年にこの會社がアルジェリヤにおける鐵鑛の產額において占めてゐた割合は五五・三％

であつた。この會社はロートシルトの支配人であるウリュチーによつて管理されてゐる。一九一四年までは、この會社の内部においてドイツ資本とフランス資本との間に激烈な闘争が行はれた。第一次大戰の初期において、すでにフランス資本が重要な役割を演じ始めた。大戰後ドイツ資本は徹底的に驅逐された。ミラボー管理下、すでに早くから事業活動を續けてゐた會社の一つである「ロンバニー・デ・ミネレー・ドウ・フェル・マグネチツタ・ドウ・モクタ・エル・ハーデイツド」が、一九三七年に鐵鑛總生産額において占めてゐた割合は一三、六%であつた。この會社にはイギリス資本も參加してゐた。スウエーデン資本の參加せる「ソシエテ・デ・ミーヌ・ドウ・ザカール會社の一九三七年の採掘額の割合は一三、三%であつた。

アルジエリヤの鐵鑛業は、アルジエリヤにおける最も舊い鑛業部門に屬してゐる。

アルジエリヤにおける鐵鑛の産額（單位千噸）

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一九一三年 | 一九二九年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 | 一九三八年 | 一九三九年 |
| 一三四九 | 三一九六 | 一六七五 | 一一七一 | 二四二五 | 三〇三三 | 三〇〇〇 |

（註）「ミネラル・インダストリー」一九一九年・一九三九年。

一九三九年の鐵鑛の産額は、一九一三年に比較して二倍以上に增加してゐる。鐵鑛の産額に關しては、アルジエリヤは他の北アフリカ植民地中第一位を占めてゐる。

鐵鑛はフランスにとつて不足してゐる鑛物であるにも拘らず、アルジエリヤ産鐵鑛はフランスへ少量しか輸入されなかつた。フランスはスウエーデン及びスペインから多量の鐵鑛を輸入してゐた。一九三七年には、アルジエリヤ産鐵鑛輸出額の僅か四・〇%がフランスへ輸入されたにすぎない。而してアルジエリヤ産鐵鑛の主要販賣市場は、イギリス、ドイ

フ及びベルギーであつた。

燐灰岩の採掘もアルジエリヤにおける最も舊い鑛業部門に屬してゐる。アルジエリヤにおいて燐灰岩の採掘が開始されたのは、十九世紀末のことである。アルジエリヤにおける燐灰岩の鑛脈は、チユニスやモロッコのそれと異なつて、海岸や港から遠く離れた國内の奥地に横たはつてゐる。アルジエリヤにおける燐灰岩の埋藏量は約十五億噸と評價されてゐるが、その品質はチユニスやモロッコの燐灰岩にやゝ劣つてゐる。燐灰岩の採掘額に關しては、アルジエリヤは北アフリカ諸國の間にあつて第三位を占めてゐる。アルジエリヤにおける燐灰岩の年産額は、五千萬噸乃至六十萬噸である。

アルジエリヤにおける燐灰岩の採掘額（單位千噸）（註）

| 一九一三年 | 一九二九年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 | 一九三八年 | 一九三九年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 三七八 | 七七八 | 六〇四 | 五三一 | 六三一 | 五八四 | 五五三 |

（註）「ミネラル、インダストリー」一九一九年、一九三九年

アルジエリヤにおける燐灰岩の採掘に從事してゐる最大の會社は「コンパニー・デ・フオスフアート・ドウ・コンスタンチーヌ」であるが、この會社がアルジエリヤにおける燐灰岩の採掘額において占める割合は、一九三七年には七二・三％であつた。この會社の支配人の一人ベーリュホツアは周知の如く、フランス石炭鑛業の代表者である。アルジエリヤ鑛業の總生産額（價額）において鐵鑛及び燐灰岩が占める割合は九〇％であつた。

有色金屬鑛に關しては、アルジエリヤは少量の鉛鑛（一九三七年の産額は七千九百噸であつた）と亞鉛鑛（一九三七年の産額は一萬六千百噸であつた）とを産出してゐる。アルジエリヤにおける鉛鑛の採掘において獨占的地位を占めてゐるのは、「コンパニー・ミニエール・ドウ・ゼンデイ」（採掘額の五八・六％を占む）と「コンパニー・デ・ミーヌ・ドウ・シャール・ルーバン」（採掘額の一八・九％を占む）の二つの會社である。最大の亞鉛鑛採掘會社はベルギー資本の參加してゐる「ソシ

エテ・ドウ・ラ・ヴイエーユ・モンターニユ」（採掘額の三分の一以上を占む）である。この外に、アルジエリヤは黄鐵鑛とアンチモニーを産出してゐる。一九三八年のアンチモニー産額は一千二十六噸であつて、世界産額の二、七％を占めてゐた。鑛物燃料の確保の點では、アルジエリヤは他のアフリカ領土と同様に（但しモロッコは例外であるが）恵まれてゐない。

アルジエリヤにおける石炭の採掘は、第一次世界大戰中にケナツアで開始された。だがこの唯一の石炭産地ケナツアの産額は極めて少量であり、而も漸次減少の傾向を示してゐる。産額の最も多かつた一九三五年においてすら僅か三萬八千噸にすぎず、オラン鐵道における石炭の需要を辛じて充たすことが出來た。一九三八年には、アルジエリヤにおける石炭の産額は一萬四千噸に減少した。石油の産地は現在までのところまだ發見されてゐない。

全領土の二十分の一を覆へる森林は、アルジエリヤの大なる富を形成してゐる。最も有用な樹木！コルク樫は、東部のコンスタンチーヌ地區に繁茂してゐる。このコルク樫は良質であつて、ドイツ、イギリス及びアメリカに多量に輸出されてゐた。

アルジエリヤは植物纖維の原料であるハネガヤを産出してゐる。その主要産地はオランであつて、栽培面積は約四百萬ヘクタールに達してゐる。ハネガヤは殆ど全産額がイギリスへ輸出された。而してイギリスではハネガヤは紙に精製され、これらの紙の大部分はフランスへ輸出されてゐた。アルジエリヤでは又羊毛が少量ながら生産されてゐる（一九三八年の産額は七千四百噸であつた）。

## 五

チユニスはアルジエリヤに比較して面積は遙かに小さいが、燐灰岩の産額においては北アフリカで第一位を占めると共に、（アメリカに次いで）世界第二位を占めてゐる。燐灰岩の主要鑛層はカザブランク（

百四十粁の地點にあり、約百粁の距離に擴がつてゐる。燐の含有量に富むチュニスの燃灰岩（六五％の燐を含む）の埋藏量は、十億噸と算定されてゐる。チュニスにおける燐灰岩の採掘額は一九一三年には二百萬噸を越えてゐたが、一九三九年には百八十二萬八千噸であつて世界産額の一五、一％を占めてゐた。

チュニスにおける燐灰岩の産額（單位千噸）（註）

| 一九一三年 | 一九二九年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 | 一九三八年 | 一九三九年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 二一七〇 | 二五一一 | 一五〇〇 | 一四八八 | 一七八五 | 一九三七 | 一八二八 |

（註）「ミネラル・インダストリー」一九一九年、一九三九年。

チュニス鑛業の總生産總の七二％（價額）は燐灰岩が占めてゐる。チュニスの燐灰岩の採掘においては「コンパニー・ドウ・フオスフアート・ドウ・ガフサ」（この會社にはイギリス資本が僅かながら參加してゐる。）が重要役割を演じてゐる。フランスの化學工業會社「セン・ホーベン」と緊密な關係を有するこの會社は、ミラボーによつて融資されてゐる。なほこの會社はシュナイダー及びロートシルトの利益をも代表してゐる。一九三七年には「コンパニー・ドウ・フオスフアート・ドウ・ガフサー」はチュニスに於ける燐灰岩總産額の六六・六％を採掘した。第二位を占める會社「コンパニー・チュニシヤンヌ・デ・フオスフアート・ドウ・ディエーベル・ムディイラ」（採掘額の一六・二％を占む）は「ソシエテ・マルセーユエーズ・ドウ・クレヂー」の代表者によつて支配され、ロートシルトの利益は他の會社「ソシエテ・デ・フオスフアート・チュニジヤン」（この會社にはイギリス資本も參加してゐる）においても代表されてゐる。「ソシエテ・デ・フオスフアート・チュニジヤン」は一九三

七年にはチュニスにおける燐灰岩産額の一一・八%を採掘した。

チュニスの燐灰岩は生産高の殆んど全部が輸出された。一九三九年の重要販賣市場はフランス（輸出額の二五・七%を占む）、イタリー（二四%）及びスペイン（一三・一%）であつた。イタリーがチュニスの原料に多大の關心を寄せてゐたことを特に注意する必要がある。イタリーの製鐵業及び化學工業の代表者は、チュニスから鐵鑛、燐灰岩及び鉛を大量的に購入してゐた。

チュニスの鐵鑛資源は三千萬噸と算定されてゐるが、その採掘はアルジエリヤにおけるほど進んでゐない。チュニスにおける鐵鑛採掘額はこの國の鑛業總生産額の二四%を占めてゐる。

チュニスにおける鐵鑛産額（單位千噸）（註）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一九二三年 | 一九二九年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 |
| 五九四 | 九七三 | 五〇三 | 七二三 | 九四七 |

| | |
|---|---|
| 一九三八年 | 一九三九年 |
| 八二二 | 八〇〇 |

（註）「ミネラル・インダストリー」一九一九年、一九三九年

チュニスにおける鐵鑛の採掘は二つの會社――マレーによつて融資され、イギリス資本の參加せる「ソシエテ・デ・ミーヌ・ドウ・ディエーベル・ゼリサ」（チュニスの鐵鑛産額においてこの會社が占めた割合は七六・八%であつた）と「ソシエテ・デ・ミーヌ・ドウ・アリヤ」（割合は一一・八%）とによつて獨占されてゐる。

チュニスには鉛及び亞鉛の多くの鑛層がある。だがこれらの金屬鑛の採掘額は僅少であり、而も漸次減少の傾向さへ示してゐる。例へば一九一三年から一九三八年までに、亞鉛鑛の採掘額は二千噸から六百噸に減少し、又鉛鑛の採掘額は三萬一千三百噸から一万九千五百噸に減少した（註）。主要な鉛鑛採掘會社は、「ソシエテ・マルセーユエーズ・ドウ・クレヂー」によつて融資されてゐる「ソシエテ・デイエーベル・ハルーフ」、ベルギー資本の參加せる「ソシエテ・レ・ミーヌ・レユニー」ミラボーによつて融資されてゐる「ソシエテ・フランセーズ・ドウ・バジナ」である。亞鉛鑛の採掘においては「ソシエテ・デ・ミーヌ・ドウ

ディエベル・チュイラ」が殆んど獨占的地位を占めてゐる。一九三七年のチュニスの亜鉛鑛採掘額においてこの會社が占めてゐた割合は六五・二％であつた。

（註）「スタチスチック・ミネロー・エ・メトー」誌一九三九年四月號。

モロッコは北アフリカのフランス領土の中でも最も開發が後れてゐる。モロッコにおける燐灰岩の採掘は世界大戰中に――即ち一九一六年に――やうやく開始された。モロッコの燐灰岩は良質であつて（燐の含有量は七七――七八％及び六八――七二％）、その埋藏量は約十五億噸と算定されてゐる。燐灰岩の鑛層はカサブランカの東西に擴がつてゐる。燐灰岩の產額では、モロッコは北アフリカにおいて第三位を占めてゐる。

モロッコ產の燐灰岩の大部分は、主としてコールマンの利益を代表してゐるところの國營組織「オフイス・セリフイアン・デ・フオスフアート」によつて採掘された（一九三七年にはその割合は總產額の九五・八％を占めてゐた）。

モロッコにおける燐灰岩の產額（單位千噸）（註）

| 一九二九年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 | 一九三八年 | 一九三九年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一六〇八 | 一三〇三 | 一二五八 | 一五〇二 | 一四四七 | 一四九二 |

（註）「ミネラル・インダストリー」一九三九年。

モロッコにおける鐵鑛埋藏量は六千万噸と算定されてゐる。だがモロッコにおける鐵鑛の採掘額は僅少である。モロッコの東部及び南部には良質のマンガン鑛（マンガンの含有量五〇％）の豐富な層がある。その推定埋藏量は五百万噸、可能な埋藏量は一千万噸と算定されてゐる。マンガン鑛が發見されたのは一九二九年のことである。だがモロッコにおけるマンガン鑛の採掘額は僅少であつて、四万噸に足りない。モロッコ

の南部には世界で最も豐富なコバルトの鑛脈がある。その一九三七年の産額は世界産額の一六・六%を占めてゐた。南部には又モリブデンの鑛層がある（その一九三九年のモロッコにおける産額は世界産額の〇・七%を占めてゐた）。銅はモロッコの一聯の地區で採掘されるが、就中、その最大の鑛脈はスー地區にある。モロッコの石炭はどく最近採掘に着手された。ジャラダの炭田は一九二八年に發見され、採掘は一九三二年に開始された。石炭の埋藏量は、良質の無煙炭數千万噸と算定されてゐる。モロッコにおける石炭の採掘には、ベルギー資本が僅かながら參加してゐる。だが石炭の採掘額は現在までのところでは、大して重要な産業的意義を持つてゐない。

モロッコには有色金屬鑛では鉛、亜鉛、錫がある。これらの金屬鑛の産額は僅少であつて、一九三七年には、鉛鑛二万三千噸、亜鉛鑛九千七百噸であり、錫に至つては僅か數十噸にすぎなかつた。鉛鑛の採掘に於て重要な役割を演じてゐるのは、ベルギー資本の參加せる「ソシエテ・デ・ミーヌ・ドウ・ドーリ」、「ソシエテ・デ・ミーヌ・ドウ・ゼリヂイヤ」、スペイン及びベルギーの資本の參加せる「コンパニー・ロアイヤル・アスツリヤンヌ・デ・ミーヌ」、の諸會社である。

モロッコの北部（メクネスの近く）では油田が發見された。採鑛強化のために、一九二八年にはモロッコに特殊な鑛物調査機關「ビュロー・ドウ・ルシエルシエ・エ・ドウ・バルチシパシヨン・ミニエール」が創設された。

かくてモロッコはアルジエリヤ及びチユニスよりも數多くの豐富な鑛物を持つてゐると言ふ事が出來る。モロッコには又は豐富な森林がある。ラボータ附近には世界最大のコルク樫の森林がある。その伐採は第一次世界大戰後に始めて着手された。

モロッコ産の羊毛は良質である。しかしその産額は僅少である。即ち一九三八年の産額は二万三百噸であつた。

北アフリカでは、その經濟の明確な農業的性質にも拘はらず、依然として鑛物の産業的利用が重要な役割を演じてゐるが、これに反して佛領西アフリカは、本國のために各種の農産物を栽倍してゐる。西アフリカの重要農産物にして又主要輸出品である落花生は、フランス石鹸工業の獨占的經營に屬してゐる。一九三八年には佛領西アフリカは、全アフリカに於ける落化生總産額の五〇%を生産し、又世界總生産額の一二・二%を生産した。（即ちその生産額は七百六十七萬噸であつた）。

佛領西アフリカは森林に富んでゐるが、しかしこの森林はまだ始んど手がつけられてゐない。第一次大戰後佛領西アフリカは、フランスの棉花栽倍の可能な基地としてフランス資本の注意をひいた。しかしセネガルで行はれた棉花栽倍の試みは成功しなかつた。

第一次世界大戰の前には、ギニー産の野生護謨が重要な意義を持つてゐたが、大戰後極東において護謨の栽倍が發達したゝめに、ギニー産の護謨は重要性を失つた。西アフリカの鑛物的資源はまだ充分に調査されてゐない。石炭はウガド、セネガル及びニジェルに埋藏されてゐる。その外、佛領西アフリカではチタンの豐富な産地が發見され、その採掘額は漸次增加しつゝある。一九三三年には僅か三百十噸にすぎなかつたチタン鑛の採掘額は、一九三八年には八千四百三十六噸に增加し、チタン鑛世界産額の三・一%を占めてゐた。

佛領赤道アフリカは、フランス植民地の中でも探檢事業の最も後れた植民地に屬してゐる。その重要輸出品は木材である。フランスの木材生産總高のうちで佛領赤道アフリカが占めてゐる割合は一九三七年には七三・三%であつた。野生護謨はコンゴに産し、棉花はチャード及びヴバンギシャリに舊くから栽倍されてゐたが、最近ではこれらの産額はすべて減少してゐる。佛領赤道アフリカは又金屬に富んでゐる。ガブン及び中央コンゴでは有色金屬鑛——銅、鉛、亜鉛——の産地が發見されたが、その採掘はまだ行はれてゐない。



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

印度支那は、その農業原料がフランスにとつて大なる實際的意義を有するところの唯一のフランス植民地である。印度支那の重要農産物は護謨である。第一次世界大戰の前には、印度支那では護謨は殆んど倍されてゐなかつたが、大戰後護謨の産額は漸次增加し、一九三八年には、フランスにおける護謨の需要を完全に充たすまでに至つた。一九三九年には護謨の生産額は六万九千噸に達した。一九三八年の國際護謨協定によつて、印度支那における護謨の最大生産額は六万噸と決定された。護謨の主要生産地域は交趾支那であり、第二位はカンボチヤが占めてゐる。護謨の栽倍面積の六八%は、フランス資本支配下の二十七の會社に屬してゐる。印度支那の護謨農園には民族資本が殆んど缺如してゐた。印度支那における最大の護謨生産會社は「ソシエテ・フイナンシエール・デ・コーチューク」であつて、この會社にはベルギー資本も參加してゐた。而して印度支那の護謨農園のみならず、スマトラ、英領マレー及びアフリカの護謨農園までがこの會社の管轄下にあつた（註一）。

印度支那に於ける護謨の生産額（單位千噸）（註二）

| 一九三四年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 | 一九三八年 | 一九三九年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 〇・一六 | 二九 | 四一 | 四五 | 五八 | 六九 |

（註一）ローブケーン「佛印の經濟的發展」一九三九年、二三〇頁。

（註二）「「アヌエール・アンテルナショナル・ドウ・スタチスチック・アグリコール」一九三九年――一九四〇年。

印度支那はその採取せる護謨の殆んど全部を輸出してゐる。印度支那の輸出總額に於ける護謨の比重は、一九一三――一七年の〇・八%から一九三二――三六年には八・四%に增大した。一九三七年には、フランスは印度支那の護謨の輸出總額の僅か二四%を受取つたにすぎず、印度支那の護謨の主要販賣市場はアメリカ及び日本であつた。

印度支那に棉花を栽倍せんとする試みは大して成功しなかつた。印度支那では養蠶業も行はれてゐるが、しかしこの部門は局地的意義しか持

つてゐない。一九三七年の印度支那における繭の收獲高は僅か三十二万二千噸にすぎなかつた。

印度支那は石炭の採掘額において、フランス植民地中第一位を占め、又本質において唯一つの地位を占めてゐる。最大の炭田は印度支那の東北部――トンキンにある。トンキンの石炭は良質である。その埋藏量は二百億噸と算定され、本國の石炭埋藏量（百六十億噸）より豐富である。トンキン產の石炭は大部分が輸出され、約二五％が國內消費に當てられてゐた。印度支那の輸出總額における石炭輸出額の比重は、一九一三―一七年の二・一％から一九三二―三六年には五・六％に增大した。印度支那產石炭の大部分は日本、香港及び支那へ輸出され、フランスへは（一九三七年に）僅か一六・二％が輸出されたにすぎなかつた。印度支那における石炭の產出高は依然少量ではあるが、しかし漸次增大の傾向を示してゐる。

印度支那における石炭の產出高と消費高（單位千噸）（註）

| | 一九三二年 | 一九三三年 | 一九三四年 | 一九三五年 | 一九三六年 | 一九三七年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 產出高 | 一七一四 | 一五九一 | 一五九二 | 一七四八 | 二一八六 | 二三〇八 |
| 消費高 | 五一八 | 四六二 | 四二八 | 四九四 | 五六九 | 六二八 |

（註）　マーレット「海外のフランス領土の工業化の問題」一九三九年一〇頁。

印度支那に於ける石炭の採掘は、舊くからあつた大石炭鑛業會社の一つ「ソシエテ・デ・シャルボナージュ・ドウ・トンキン」（一九三七年に印度支那の石炭總生產高においてこの會社が占めた割合は七一％であつた）と戰後に出現した會社「ソシエテ・デ・シャルボナージュ・ドウ・ドン・トリー」（一九三七年の印度支那の石炭總生產高におけるこの會社の割合は二一％であつた）とによつて獨占されてゐる。この二つの會社は、パリーの「商工銀行」と「印度支那銀行」とによつて融資されてゐる。トンキンの炭田（クアン・イエン）だけで印度支那產石炭の九八

19.

%を産出してゐる。石炭の採掘は濫掘的であり、表面の炭層のみが採掘されてゐる。

印度支那の豐富な鐵鑛の採掘は最近（一九三四年以後）開始されたばかりである。鐵鑛の採掘額は低水準にあり、一九三七年の採掘額は三萬八千噸であつた。マンガンを混入せる少量の良質の鐵鑛がトンキンで採掘されてゐる。印度支那産鐵鑛は殆んど全部が日本へ輸出されてゐる。有色金屬の鑛層もトンキンに集中されてゐる。トンキンの亞鉛鑛は良質である（金屬含有量四〇%）。だが印度支那における亞鉛鑛の産額は少量であつて（一九三七年には一万一千百噸であつた）、印度支那の全鑛業の生産價額の僅か二%を占めるにすぎなかつた。亞鉛鑛山の採掘は、ロートシルトの融資せる「コンパニー・ミニエール・エ・メタルルジック・ドウ・リンドシーヌ」によつて獨占されてゐる。生産額の大部分（四分の三）が輸出されてゐる。一九二四年までは亞鉛鑛は原鑛のまゝ輸出されてゐたが、一九二四年にハイフオンの炭田の近くに、三つの熔鑛爐を持つ亞鉛精煉所が設立され、以後印度支那は金屬の輸出を開始した。

印度支那では良質の錫鑛（金屬含有量六〇%）が採掘されてゐる。しかしその産額は（トンキンを主要産地とするが）少量である（一九三七年には二千六百一噸であつた）。印度支那における錫鑛の採掘は主として二つの會社――「ソシエテ・デ・ミニエール・ドウ・リンドシーヌ」（印度支那に於ける錫鑛總産總の三分の二を採掘してゐる）と「ソシエテ・デ・エタン・エ・ウオルフラム・ドウ・トンキン」（總産額の三分の一を占む）とによつて獨占されてゐる。印度支那産錫の大部分（六七%）はシンガポールへ輸出された。

一九二六年以後は、トンキンの外、ラオス、アンナン及びカンボチヤでも亞鉛鑛及び錫鑛の採掘が開始された。

最近採掘に着手されたばかりのその他の鑛物のうちで注目すべきものは、アンナンのマンガン鑛（一九三六年の採掘額は三千四百四十四噸）、ウオルフラム（四百二十七噸）、どく少量の鉛及び燐灰岩である。

従つて印度支那における鑛物的資源の採掘は、世界恐慌前においても、他のフランス植民地に比較して遙かに集約的であつた。印度支那の鑛業生産價額は、一九二三年の九百五十七万一千弗から一九三七年には一千九百二十七万一千弗に増大した。印度支那の鑛業會社の有價證券發行額は、一九二四年の一千八百七十万フランから一九二九年には一億四千九百五十万フランに増大した。それと同時に、印度支那の鑛業に對する投資額の不充分さが指摘されねばならない。即ち一九三七年の投資總額の割合について見るに、農業の二三・九%、社會事業の二八・八%に對して、鑛業は〇・七%にすぎなかつた（註）。印度支那の鑛業には外國の投資が殆んど行はれてゐなかつたが、一九三七年に至つて始めて、日本のコンツエルンが鐵鑛及びマンガン鑛の採掘權を獲得した。

（註）　ローブケーン「佛印の經濟的發展」一九三〇年、一八四頁。

マダガスカル。マダガスカルの産する主要鑛物原料は雲母と石墨である。マダガスカルに於ける雲母の採掘は第一次世界大戰の直前に開始された。その一九一三年の採掘額は六噸にすぎなかつたが、一九三八年には六百七十八噸に増加し、世界産額の一・九%を占めてゐた。マダガスカル産の雲母は殆んどすべて輸出されてゐるが、フランス向けの輸出は輸出總額の僅か一八・一%（一九三七年）を占めるにすぎず、主要な販賣市場はイギリス、ドイツ及びアメリカであつた。

マダカスカルにおける石墨の採掘は舊くから行はれてゐる。すでに一九一三年には六千三百噸の石墨が採掘されたが、一九三八年にはその採掘額は一万四千五百四十六噸に増加した。一九三七年の世界石墨生産高においてマダカスカルが占めた割合は八・八%であつた。一九三八年におけるマダカスカル産石墨の主要販賣市場は、イギリス（輸出總額の三五・一%を占む）、フランス（三一%）及び日本（一三・八%）であつた。マダカスカルの東南部では良質の石炭の巨大な層が發見された。マ



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ダカスカルには又良質の鐵鑛が豐富に埋藏されてゐる。これらの石炭及び鐵鑛の採掘はまだ行はれてゐない。

ニューカレドニヤ島は各種の鑛物――ニッケル、クローム、コバルト、鐵鑛、無煙炭を豐富に埋藏してゐる。だが採掘されてゐるのは、世界的意義を有するニッケル及びクロームのみである。ニューカレドニヤに於けるニッケル鑛の埋藏量は二百万噸と算定されてゐる（世界埋藏量の約一％に當る）。ニューカレドニヤはニッケルの產額において長い間に亘り世界第一位を占めてゐるが、二十世紀初頭にカナダのため第一位を奪はれた。一九三八年のニッケル產額は、（一九一三年の八千二百噸に對して）七千六百噸であり、世界產額の六・九％を占めてゐた。

ニッケルの採掘においては「ニッケル」會社――その經營會は殆んどロートシルトの代表のみによつて構成されてゐる――が支配的地位を占めてゐる。ニューカレドニヤ產のニッケルは、一部分は原鑛のまゝ輸出され（一九三九年上半期におけるその輸出額の割合は、フランス向け一五％、日本向け五一％、ドイツ向け三四％）、他の部分は金屬の形で輸出された（一九三九年上半期におけるその輸出額の割合は、フランス向け七七％、ベルギー向け二三％であつた）。

ニューカレドニヤのクローム鐵鑛の採掘においては、外國資本――即ち英米資本が重要な役割を演じた。一九三九年のクローム鐵鑛の產額は五万二千噸であつて、世界產額の五・四％を占めてゐた。クローム鐵鑛の主要輸出先はアメリカ、ベルギー及びドイツであつた。フランスへは（一九三八年に）僅か八・五％が送られたにすぎなかつた。

フランス植民地の原料の採掘及び利用に關する前述の資料に基いて吾々は、フランス植民地では各種の原料が多量に採掘されてゐたにも拘らず、その大部分がしばしばフランス本國へ送られてゐなかつたといふ結論を引出すことが出來る。外國市場が――特に印度支那にとつては日本市場が――、軍事的意義を有する重要な植民地產原料（クローム、鐵鑛、

錫等）の對外貿易において重要な地位を占めてゐた。

第二次大戰におけるフランスの敗北によつてフランス植民地の問題は、植民地の政治的運命の見地からのみならずヴイシー政權下のフランスによる植民地利用の可能性といふ見地からも、極めて鋭く提起された。本國の資源を失つたフランスにとつて、その植民地の重要資源、特に北アフリカ領土の資源は重要な意義を持つてゐる。フランスの現在の支配階級は、植民地開發の強化に多大の期待をかけてゐる。

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

10

16. 9. 8

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http //www jacar go jp/

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/